



## こんな自然学校に・・・

夏休みに入り、2学期利用の学校が下見に来ています。勤務の関係から、担当指導主事に代わって、下見対応をすることが時々あります。

まず最初に、利用校の自然学校のねらいを聞いています。すると、「自然に関心を持ち、自然に親しむ（自然体験）」「自然の中で仲間と存分にふれ合い、助け合いの心を育てる（仲間づくり）」「与えられた仕事は、最後まで責任を持って取り組む（責任感）」「安全面に配慮しながら、できるだけ手出しをせず子どもたちの活動を見守る（自主性）」等が返ってきます。中には、「・・・」と黙り込んでしまう先生もおられます。詳細の日程案を考えて来られる先生もあり、それぞれの学校のねらいに沿ったプログラムになっているか、じっくりと見せてもらい、私から質問するとしっかりと答えられず、昨年のままであるということもあります。決して、今までのプログラムや活動が悪いと言っているのではありません。少なくとも、今までのプログラムや活動を自分なりに理解し、昨年度の様子をしっかりと聞き、引き継ぎができていくかどうかということです。

また、子どもたちに、学校では得難い体験活動をさせたいという思いから、盛りだくさんの活動を組み込んだプログラムを考えて来られる先生もあります。明らかに詰め込み過ぎているので、私が「どの活動を一番にさせたいのですか」と聞くと、悩みながらも答えられますが、「その活動で、子どもたちにどのような力をつけさせたいのですか」の質問には、しばらくの間、沈黙が続きます。活動ありきではなく、子どもたちにつけさせたい力をじっくりと考えておいてほしいものです。〇〇の活動をしたから、必ず、△△の力がつくとは言いきれませんが、自然学校をとおして、子どもたちをどう変えたいのかという教師の願い・思いを持っておいってください。

下記の4点を常に意識して、プログラムを考え直してみてください。

- ① 子どもたちの実態にあった目標を持った自然学校に
- ② その目標を達成させるための活動形態を
- ③ 子どもたちの頑張りや成長を認める評価を大切に
- ④ 活動をとおしての気づきや発見したことを振りかえる時間の確保を

## 柔軟な対応を！

下見対応やプログラム相談後、大きくプログラムが変更する場合があります。単独利用の学校であれば、それは容易にできます。しかし、連合による自然学校の場合は、そんなに簡単にはプログラム変更はできません。例年の流れがあり、担任の思いも違うなかで、何度も話し合いを重ねてきたはずですが、それが、下見対応で、大きく変わったケースがありました。

子どもたちの生活は、各学校毎の生活班によるものです。2日目と4日目には、各中学校区毎の活動として、朝来山登山と火おこし・野外炊事を交代するパターンでした。3日目は、昨年度までの円山川公苑に変わり、「隠れ家づくり」を取り入れようとしたのです。どうしても、全員に「隠れ家づくり」を体験させてやりたいという考えでした。時間が短く、雨天の場合は、大屋根広場では人数が多すぎて、実施できないという問題が明らかとなりました。色々な方法を提示する中で、下見に来られた先生方でじっくりと話し合い、「朝来山登山」「火おこし・野外炊事」「隠れ家づくり」の活動を、2～4日にかけて、A・B・Cというグループに分けローテーションで行うという結論に至りました。今までに考えもつかなかった新たなプログラムですが、子どものことを一番に思う先生方の考えが一致したのです。活動班を決め直すことになりましたが、先生方の満足した表情がとても印象的でした。

## 兵教組青年部サマーセミナーでのフロンティアの活動！「階段・小径づくり」



2013 兵教組青年部サマーセミナーが、7月27日（土）から2泊3日で開催されました。2日目の28日（日）に、教職員のための教育講座として6つの講座があり、そのうちの 하나가「フロンティア」であり、奉仕活動を行いました。昨年度は、隠れ家づくりのフィールドとなる「きつね入口横フィールド」と、水中生物の観察場所となる「けろトープ」の整備を行いました。今年は、雑木林内の散策路での「階段・小径づくり」に取り組みました。

南但馬自然学校の正門よりやや下辺りから、工作室に向かう三叉路までの雑木林で、そこを自然観察フィールドにする構想があります。普段は、そこをほとんど通らないので、子どもたちが安全に通るため、落ち葉や木々をかき分け、新たに小径を作る作業を行いました。また、普段使い慣れていない「かけや」「つるはし」「スコップ」「のこぎり」等の工具を用いて、階段を造る作業も開始されました。新しく小径・階段を造るということから、「フロンティア」で「開拓」そのものです。最初は戸惑いながらも、杭を打ち込み、丸太を並べて階段の基礎を作っていきます。木の根っこや石が邪魔をして、なかなか水平が保てず苦勞していましたが、そこは先生方で、色々なアイデアを出し合い、手慣れた手つきに変わって行きました。階段づくりは、かなり難しいのではないだろうかと心配していましたが、本校職員のアドバイスもあり、大変立派なものに仕上がりました。

昨年度より、県立山崎高等学校森林環境科学科の生徒が、林業体験実習として、本校の大木を伐採してくれています。その雑木林の杉も、山崎高校の生徒が、伐採する予定になっています。昨年度の冬場、職員作業でも少しずつ手を加えていました。今までは、うっとうしい感じすらしていた場所ですが、たくさんの人の手により、見違えるようになってきています。太陽の光が差し込めば、植物の生態系も随分と変わってきます。おそらく、タケノコも出てくることでしょう。境界線の右側は、私有地でありほとんど手がかけられていません。散策路を挟んで、人間が手を加えることでこんなにも違うものかということが一目で分かると思います。環境教育の場として、最適であると思います。



これらの活動を、何とか自然学校で、小学校5年生の子どもたちにもできないものだろうかと思案中です。大人のように、スムーズにはできないかもしれません。安全面についても、考えていかなければならない点が多くあります。しかし、例え一段の階段であっても、ほんの数メートルの小径であっても、自分たちの手で造ったという満足感は得られるはずです。その学校の子どもたちだけで完成するのは無理であっても、その作業の続きを他の学校の子どもたちが、また、本校を毎年利用している学校においては、5年生の後を4年生が引き継ぐなど、「つながり」のある活動となります。原体験の観点からも、「木体験」「土体験」「草体験」を高めるなど、充実した活動であると考えられます。

### 編集後記

今回は、下見対応の様子と兵教組青年部の先生方の取組を紹介します。今の学校現場は、非常に忙しいと思いますが、今までの慣習にとらわれず、今年の5年生の子どもの実態にあった自然学校であることを望んでいます。兵教組の取組は、発想の転換になるかもしれませんね。

（文責 主任指導主事兼指導課長 北條 勝也）